

佐々木俊二さん

(東北学院大学副学長)

『震災学』は何を目指すか

宮城県の東北学院大学が雑誌『震災学』を創刊した。東日本大震災直後に、ボランティアの拠点となる「災害ボランティアステーション」を開設するなど、同大学は被災地・東北の大学として活動を続けてきた。『震災学』刊行に込めた思いを聞いた。

震災は繋がっている

——『震災学』創刊のいきさつから教えてください。

東北の大学として、学生たちも被災体験をした震災にどのように向き合っていくべきか——。それが、震災直後から私たちに突きつけられていた課題でした。

『震災学』という学問はもちろん存在しません。しかし、さまざまな学問分野を横断した具体的な視点を社会に示していくことが、これから震災を考え、被災地を見つめていくうえで、羅針盤になるのではないかと

学生のボランティアとともに被災地に通って、人々の話を直接聞くうちにそんな考えに至りました。

被災地から離れた首都圏や関西圏では、時間が経てば被災地の現実は忘れられていくでしょう。それは仕方がないのかもしれない。でも、そのスピードをできるだけ緩やかにしなければならぬという思いもありました。

だからこそ『震災学』は、雑誌という形にこだわりました。大学の出版物だからといって、論文集や研究紀要にはしたくなかった。多くの方に手に取ってもらうために、書店に並ぶ雑誌を作りたかったのです。

もうひとつ大切にしていたのは、『震災学』は地元で活動する出版人とともに作りたかったことです。

今年一月、震災以降の出版活動によって、仙台の出版社・荒蝦夷が全国の出版社の団体が表彰する梓会出版文化賞を受賞したことを知りました。それが代表の土方正志さんに刊行を相談するきっかけになりました。『震災学』では、震災以降のボランティアについての多くの報告がされています。また、ジャーナリス



●ささき・しゅんぞう 一九四七年東京都生まれ。東北学院大学副学長、教養学部教授。同大学災害ボランティアステーション室長。上智大学文学部卒業。東北学院大学院文学研究科博士課程修了。専攻は哲学。

トや作家、宗教者のほか、阪神・淡路大震災を経験した関西の研究者からの寄稿もあります。

昨年の六月、東北学院大学と河北新報社の連携事業で「復活と創造 東北の地域力」と題したシンポジウムを行いました。

『震災学』の巻頭にも掲載した基調講演で、阪神・淡路大震災を体験した経済評論家の内橋克人さんはこう語っています。

〈阪神・淡路大震災の際は発生直後からボランティアの方々が駆け付けてくださったけれども、公的支援制度は何も整備されていませんでした〉

内橋先生が語った十七年前の震災の問題は、私にこんな思いを抱かせました。東日本大震災における問題もここに連なっている、と。

今回の震災でもボランティアが有効に機能してきました。それは、阪神・淡路大震災で生まれて、継続されてきた動きといえます。

東北学院大学では、震災発生直後から学生会が独自に学生の安否確認を始めたり、個々の学生たちが自転車に荷物を積んで沿岸部に物資を届けたり、あるいは大学の事務スタッフが、仙台市社会福祉協議会の「災